『更科紀行』の旅程

宮川康雄

一

芭蕉の紀行文中の短篇である『更科紀行』も近年は研究がすすみ、次第に詳細にわたるようになってきた。しかもなお考究すべき多くの問題がのこされているのは、いうまでもない。本稿では、『更科紀行』の旅における芭蕉の旅程に関して、若干の考証を試みたい。

芭蕉が信州姨捨山での観月の願いを胸にして、それまで滞在していた美濃国を旅立ったのは、貞享五年（一六八八）八月十一日のことであった。中山道の木曾路を抜けて善光寺道に入り、姨捨山に到着したのは、同月十四日か十五日の夜のことである。観月の目的を達したあと、十六日の夜は坂本宿に泊った。そしてこの十六日の日中か、十七日には善光寺に参詣し、浅間山の麓を通って八月の下旬には江戸深川の草庵に帰った。以上が『更科紀行』や俳文「更科姨捨月之弁」、書簡などによって知られる芭蕉の旅程の概要である。

最初に取り上げたいのは、芭蕉が姨捨山に到着したのは八月の何日であったかという問題である。これについては、従来八月十四日とする説と十五日とする説があるが、いずれとも結論を見出せないままにおわっているといってよい。

両説の論拠を記すと、十四日到着とするのは、たとえば、阿部正美氏の『芭蕉伝記考説』（昭和三六・八　明治書院刊）である。本書では、『更科紀行』の末尾に列記されている発句のなかに、芭蕉の「いさよひもまたさらしなの郡哉」の句に続いて、旅に同行した越人の

さらしなや三よさの月見雲もなし

の句が排列されており、この「三よさ」とは、「待宵・名月・既望の三夜を含めた意と見るのが当然である」から、「一行が更科の里に入ったのは十四日の夜と考えられる。」と断じている。十四日に到着したと仮定すると、日数の余裕という点からみてどうかとの疑問がおこるが、これについては本書では、「岐阜からここまでいかに険路とはいへ、三泊四日で来られない距離ではない。」としその可能であることを主張している。

右に対して十五日到着とするのは、たとえば赤羽学氏の『芭蕉の更科紀行の研究』（昭和四九・九　教育出版センター刊）である。本書では、芭蕉の姨捨山到着は、十五日としてこそはじめて可能となるとして、次のように論じている。「問題になるのは、岐阜から更科までの距離とそれを踏破するに要した日数である。今、岐阜から中仙道に出て東上し、洗馬（せば）の宿から善光寺道に入り、姨捨（おばすて）までの距離を計算するとざっと六十二里になる。これは、宇野俊平編集『日本街道総覧』所収「五海道中細見記」（安政五年）に従った。尚、江戸時代の道中記によれば、若干の誤差を生ずるが、それは二、三里のもので、この数字はおおむね準拠してよい。この六十二里を五日間

に割ってみると、一日の歩行距離が十二里強となり、やや無理な感じであるが、不可能ではない。或は芭蕉は、十一日に岐阜を発ったのではなく、それ以前に少し東に向かっており、門人もそこまで随行して留別の宴が催されたとも考えられる。」こうして本書では、十四日到着とする阿部氏の説に対しては、「十一日に美濃（岐阜もしくはその郊外）を出発したとする限り、一日の歩行距離が十五里強となり、到底果し得ることではない。」ときびしく批判し、「姨捨到着の日は、「更科姨捨月之弁」の、「思ふにたがはず、その夜さらしなの里にいたる」という記述を信じて、十五日とすべきであろう。」と結論している。十五日到着とすると、越人の句の存在が疑問となるが、これについては、「「三よさの月見」を待宵・名月・既望の月見とみる説は、既に寂斎梧青の『更科紀行』の注解に見えるもので、決して無稽の説ではない。また『笈日記』には、「三夜さ」を前記の三夜とする発句もある。」と、阿部氏の解釈がすでに江戸時代にでていることを指摘した上で、「それで、越人の句の成立を考えてみるに、それは、初め「三夜さの月見雲なかりけり」という形で、其角・越人両吟歌仙の其角の発句「落着に荷兮の文や天津雁」に付けた脇句である。（中略）芭蕉は、更科での月見に越人の句のないことをさびしく思い、この脇句を発句に改めて、『更科紀行』に収めたのであった。連句中の一句としてみた場合、「三よさの月見」は待宵・名月・既望の月見としてさしつかえない。しかしそれをそのまま芭蕉が発句として紀行中にはめ込んだため、事実に反して十四日に芭蕉の一行が更科に到着していたかの如く誤解される結果を招いたのである。」と詳しくこの句が『更科紀行』のなかに収められた理由を説明し、これが事実に根拠をもたない虚構の作であることを説述している。

これら両説を比べてみると、後者の方が考証がより綿密で詳細であり、納得させられるところが多い。しかし、芭蕉の姨捨山到着の日を想定するに当って両者は共に、一日の歩行距離という肝要なことがらについては、憶測をもって推断し、自説を援護するものとしている。そこにいずれもの説がなお説得力を欠く大きな欠陥を有しているように思われるのである。そこで、本稿では芭蕉の姨捨山到着の日としては右のいずれが妥当と考えられるか、一日の歩行距離という面から検討してみることにしたい。

はじめに芭蕉の出発地に想定されている岐阜と姨捨山との距離がどれくらいあるかを確認しておくと、その距離は、赤羽氏の計算のとおり六十二里とみてよいであろう。即ち、『新修五街道細見』（昭和四八・一二　青蛙房刊　以下、距離の表示は同書による）によると、岐阜と姨捨山の手前の宿場である麻績宿との距離は、五十九里三十一丁である。これに、麻績宿から姨捨山まではどの道を通るかによって違いがでるとしても、一応二里として、この分を加えると、あわせて約六十二里となるからである。

ここから言えることは、もし姨捨山に十四日に到着したとするなら、芭蕉は岐阜出発の八月十一日から十三日までの三日間は一日に十七里を歩き、十四日は月の出前に目的地に到着しなくてはならないからそれよりも少く十一里を歩いた、と推測してもさしつかえないということであろう。もし十五日到着なら、十一日から十四日までの四日間は一日に十三里弱を歩き、おわりの十五日は十一里を歩くことになるはずである。むろんこれは、単純に平均しての計算であるから、実際には道路の状態や宿駅間の距離の遠近などの条件で異り、日によって増減があるのはいうまでもない。

こう考えると、芭蕉が姨捨山に到着した日を知るには、一日の行程として右のいずれかがより可能性が高いかを調べればよいことに

なるであろう。

芭蕉は『更科紀行』のような急ぎの旅の場合、いったい一日にどれくらいの距離を歩行しているのであろうか。これについてただちに思い浮かぶのは、翌元禄二年の奥州への『奥の細道』の旅における曾良の所謂『随行日記』である。この日記には、知られているように、両人が宿を出立した時刻や到着した時刻なども記録されており当面の好資料である。もっとも、『奥の細道』の旅では途中の名所旧跡をたずねながら旅をしており、そう急いではいないから、単純な比較はできない。しかし、たとえば五月四日の白石・仙台間を歩いた記録などは先きを急いで一日に長距離を歩いており、この際資料として十分に役立つものと考えられる。それによれば、芭蕉はこの日、朝白石を辰の刻に出発して夕方に仙台に着いているのであるが、この間の距離を調べてみると、十三里余である。この辺は、平坦地であるとはいえ、当日は降雨後折々日の光を見るほどの天気であり、道路の状態はあまりよくなかったらしい。しかも芭蕉は岩沼宿で竹駒明神に立ち寄って参拝し、歌枕として知られた境内の武隈の松も見物しているのである。

この例から推すと、芭蕉は、必要があって条件に恵まれてさえいたならば、一日に十三里以上、十五、六里あるいはこれを上まわる距離をも歩行することが可能であったことが知られるのである。

『更科紀行』の旅は、しかし、『奥の細道』の旅とは異り、平坦地は少なく、山坂の多い道を行くのである。しかも途中、鳥居峠や立峠のような険しい峠路をも越えなくてはならない。すでに宿駅制度の発達によって道路は整備されていたとしても、この旅では、一日の歩行距離も大幅に短縮されざるを得ないであろう。

そこで次に、『更科紀行』の芭蕉と同じく、木曾路から善光寺道へと江戸時代にこの街道を旅をした本居大平が一日にどれほどの距離を歩いているか、その『草まくらの日記』によって記してみよう。大平は安永二年（一七七三）、江戸への旅の途中この街道を通過している。三月十五日に美濃国から中山道を木曾路に入り、馬籠峠を越えて同夜妻籠宿に泊った大平は、このあと、翌十六日は福島宿に、十七日は洗馬宿に宿をとり、十八日には善光寺道に分かれて青柳宿に宿泊した。これらの宿場間の距離は、妻籠宿と福島宿間が十一里三十丁、福島宿と洗馬宿間が九里二十三丁、洗馬宿と青柳宿間が十一里三十二丁である。多少先きを急いではいたが、大平は、中山道を江戸へ向かう途次善光寺に参詣すべく寄り道をして善光寺道に入ったものであり、その旅は至急を必要とするものではなかった。即ち大平は、この程度の急ぎの旅でこの道（道筋に多少の変化はあったが、）を一日に十里から十二里は歩いているのである。

さきの『奥の細道』の旅における芭蕉の一日の歩行距離と、右の大平の一日の行程とを比較考量してみるならば、もとより個人差は考慮しなければならないとしても、はじめに記した一日に平均十七里歩行する場合と十三里弱の場合と、いずれがより『更科紀行』の旅の事実に近いかすでに明らかといってよいのではなかろうか。それは言うまでもなく後者にちがいない。『更科紀行』の旅は、「夜に出て暮に草枕す」（「更科姨捨月之弁」）と記しているように、一日に長時間歩行し、かつ天候にも恵まれていたらしいのであるから、一日だけ平坦地を歩行するのならあるいは前者のように一日に平均十七里を歩くこともできるかも知れない。しかし、一日平均十七里というのは、日によっては十八里以上歩くということであり、これ

は連日、大平の旅よりも二駅または三駅以上も行程をのばすことである。芭蕉がいかに健脚であり、また途中馬を利用したにしても、越人と従僕との同行三人の旅で、不可能なことといわなければならないであろう。これに対して後者の一日に平均十三里弱は、大平の行程を一駅さきまでのばした程度であるから、当然可能である。後者なら芭蕉は「夜に出て暮に草枕す」というほどの強行軍を連日は続ける必要がなく、むしろある程度の余裕をもって旅をすることができたと考えられるのである。

芭蕉の姨捨山到着の日は、以上のように、これを歩行距離という面からみるなら、八月十四日ということはあり得ず、十五日であった可能性が高い。そこでこの問題についての結論は、芭蕉の到着日は八月十五日とするのが妥当である、ということになるのである。

むろんこの結論は、芭蕉が美濃国を出発したのが八月十一日であることを前提としたものであるから、この前提がくずれるとしたら成立しないことになる。すでに十一日出発の根拠となっている「八月十一日みのゝ国をたち」との記述を含む「更科姨捨月之弁」は、『土左日記』の二月十一日の条、「十一日　あめいさゝかにふりて、やみぬ。かくてさしのぼるに、ひむがしのかたに、やまのよこほれるをみて、ひとにとへば、「やはたのみや」といふ。これをきゝてよろこびて、ひと〳〵をがみたてまつる。」という叙述を背景に記されたものらしく、十一日という日が両者に共通するところから、これは芭蕉が作為的に加えた虚構ではないかとの疑問も提出されている（赤羽学「芭蕉と八幡」『樂道』第三号　昭和五三・三）。しかし、この旅の芭蕉の行程については、八月十一日美濃国（岐阜と限定できない）出発として十分説明することができるのであり、いまはこの出発日の記述は事実であると考えておきたい。

なお補足として八月十一日岐阜発、十五日姨捨山到着としたときの芭蕉の旅程についての試案を記しておこう。まず途中の各宿場間の距離を示すと、次のようになる。

岐阜 —（一里八丁）— 加納 —（四里八丁）— 鵜沼 —（二里）— 太田 —（二里）— 伏見 —（一里五丁）— 御嶽 —（三里）— 細久手 —（一里三十丁）— 大久手 —（三里半）— 大井 —（二里二十四丁）— 中津川 —（一里）— 落合 —（一里五丁）— 馬籠 —（二里）— 妻籠 —（一里半）— 三富野 —（二里半）— 野尻 —（一里十三丁）— 須原 —（三里九丁）— 上ケ松 —（二里半）— 福島 —（一里半）— 宮ノ越 —（二里）— 薮原 —（一里半）— 奈良井 —（一里半）— 贄川 —（二里）— 本山 —（三十丁）— 洗馬 —（一里半）— 郷原 —（一里半）— 村井 —（一里半）— 松本 —（一里）— 岡田 —（一里二十八丁）— 刈谷原 —（一里）— 会田 —（三里）— 青柳 —（一里）— 麻績 —（約二里）— 姨捨山

（括弧内の距離の表示は、瀬下敬忠編『千曲之真砂』（宝暦三年、一七五三）による。）

これから、道路その他の諸条件を勘案して宿泊地を想定すると、

八月十一日　細久手泊　十三里二十一丁
十二日　三富野泊　十三里二十三丁
十三日　宮ノ越泊　十一里四丁（十一里四丁）
十四日　松本泊　十二里五丁（十二里十丁）
十五日　姨捨山着　約十里二十丁（約十里）

のごときを一案とすることができよう。この案は、芭蕉の旅程をよ

り詳細に考えるべく手がかりとするためのものにほかならないが、赤羽氏がかつて鵜沼宿を基点とする試案（『竜胆』昭和三九・九『芭蕉の更科紀行の研究』所収）を提示されたのに対して、岐阜を始点としているのは、この方が出発地であった可能性が高いからである。もっとも結果としては赤羽氏の十一日大久手泊が細久手泊と変っているだけで、他は異るところがないものとなっている。それで、これを試案とすることができるかどうかは芭蕉が一日に十三里半余りの距離を歩行することができたかどうかにかかることになるといってよかろうが、それはさきの『随行日記』の記録や大平の『草まくらの日記』の旅の例からみても可能であったと考えてよいと思うのである。

二

次に取り上げるのは、八月十五日夜の月見後の芭蕉の行動についてである。特に姨捨山での観月のほかに『更科紀行』の旅の一つの目的であった善光寺参詣の日を何日と想定するかについて二説があり、いずれをとるべきか明確な結論がでないままにおかれているので、このことに関して少しく考証してみたい。

二つの説とは、芭蕉の善光寺参詣を観月の翌日の八月十六日とみるか、その翌日の十七日とみるか、である。一般に用いられているのは、十七日とするもので、『校本芭蕉全集』の年譜などもこの日を記載している。

その理由は、しかし必ずしも明白ではない。芭蕉は、十五日の夜は姨捨山近辺で過ごしたことが確かであるし、翌十六日の夜は坂木宿（現、長野県埴科郡坂城町　江戸時代は幕府の直轄地であり、代官所が設置されていた）に宿泊したことが、甲州の俳人敲水の稿本『祖餞』（明和九年成）に収められている未定稿の「更科姨捨月之弁」中の「いさよひもまたさらしなの郡かな」の句の前書に、「十六夜坂木と云処にて」とあり、またこの句の真跡短冊（和島茂兵衛氏蔵）にも「しなのゝさか木と云処にとまりて」という前書が記されていることなどに加えて、善光寺での吟、「月影や四門四宗も只一ッ」の句が、『更科紀行』のなかで坂木宿での作「いさよひも――」の句のあとに排列されていることなどを論拠としているようである。

十六日とする説は、こうした通説に対する疑問からでてきたものである。それによると、芭蕉の善光寺参詣を十七日とみるのは、現地の地理に照らすとき道順の点で問題があるというのである。即ち、姨捨山を基点とすると、善光寺は北方数里の地点にあるのに対して、坂木宿はほぼ東南方数里の位置にあり、ちょうど芭蕉が江戸へ戻る際の道筋に当っている。従って十六日に姨捨山の近辺を出発して坂木宿に行き同地に宿泊してから善光寺に往復したと仮定すると、芭蕉は相当の無駄足を強いられることになる。芭蕉の旅が忽忙のなかに行われたものであったことは、『更科紀行』や「更科姨捨月之弁」の記述にうかがわれるところであるし、九月初旬には江戸で越人らと「白菊に――」の八吟歌仙に同座したり、続いて素堂亭で催された残菊の宴に出席したりしていることからも明らかなので、このような状況のなかでいたずらに日数を費すような行動を芭蕉がしたとは考えがたい。芭蕉は十六日の日中に善光寺への参詣を済ませて坂木宿に着き、同地に宿泊の後江戸に向かったとみるべきだというのである。この説では、『更科紀行』のなかで善光寺での吟「月影や――」の句が坂木宿での作「いさよひも――」の句のあとに排列されていることをどう解するかが問題となるが、このことについては、『更科紀行』の句の排列の順序が必ずしも作句の順序

をあらわしていないことを挙げて、この句は善光寺に参詣したときに中空にかかる月を実際に見て作ったものではなく、いわば真如の月というごとき観念上の月をあらわした想像の句であると解するのである。

これら二つの説に関して、結論からさきに述べるならば、私見では、八月十六日とする説は成立ちがたい。芭蕉が善光寺に参詣した日は、やはり八月十七日あたりとみるのが正しいであろうというところにおちつくのである。

はじめに十六日説から取り上げる。

この日を想定する説が、『更科紀行』の句の排列の順序が必ずしも作句順ではないとするのはこれを首肯してよいであろう。この例は他にも認められるからである。また「月影や――」の句を想像の句と解するのについても、ただちに賛意を表するのは躊躇されるにしても、特に否定しなければならないほどの理由はない。問題となるのは道順であるが、このことについても論者の言うとおりである。姨捨山近辺を出発して善光寺に参詣、江戸に帰るとするなら、出発地からそのまま北に向かい、稲荷山宿を経て善光寺に到着、参詣を済ませてのち坂木宿に行くのが順当な道順というべきであり、それを先きに善光寺とはほぼ逆方向に当る坂木宿に行き、同地から北国街道を善光寺に往復して江戸への帰途につくのでは、迂路をたどることになるのは明白である。どれくらいの無駄足を踏むことになるかというと、芭蕉が十五日の夜に宿泊したと推測される姨捨山の麓の「八幡といふさと」(「更科姨捨月之弁」)即ち現在の長野県更埴市大字八幡の八幡宮附近を基点とすると、前者では、長野市の善光寺までの距離が約五里であり善光寺から坂木宿までが約九里であるから合計十四里であるのに対して、後者では、基点から坂木宿までの距離が約四里、それに坂木宿から善光寺までの往復が十八里であるから、合計約二十二里になり、この差約八里がそれに当るということになる。この八里の差は確かにそう小さいものとはいえないであろう。

十六日説が成立つためにはむろん芭蕉が一日に十四里の道のりを歩くことができたのでなければならない。しかしそれについては、この地方が川中島平(善光寺平)と呼ばれる平坦地であり、行路に殆ど障害らしいものがないをみると、さきの『奥の細道』の旅における例と比較しても、十分に可能であったといえる。芭蕉の善光寺参詣は、このようにみる限りでは、十六日と想定した方が妥当であると思われるのである。

しかし芭蕉が果してこのとおりに行動したのかというと、そう考えることはきわめてむずかしい。

十六日説が成立つためにはまず芭蕉がこの日の早朝に姨捨山附近を出発したのでなければならない。『奥の細道』の旅で十三里の道のりを歩いた例でも、芭蕉は朝辰の刻に白石を出発して夕方に仙台に着いたのであるが、この日はそれよりも長い道のりを歩かなければならないからである。ところがこの日の芭蕉の状態を推測してみると、早朝に宿泊地を立ったことは考えにくい。

『更科紀行』の旅を思い立って実行した芭蕉の目的は、何よりも『古今和歌集』や『大和物語』、謡曲「姨捨」などによって古くから月の名所として名高い姨捨山において仲秋の名月を賞することにおかれていたはずである。そのためにこそ険岨な山道を幾日もかけてこの地にやってきたのである。目的をようやく果すことができたいま芭蕉は、満足感に心が満たされると同時に、しばらくは当地を立去り難い気持を感じていたであろう。その上数日来の旅の疲れに

前夜遅くまでの観月の疲労が加わり、身体も休息を欲していたにちがいない。さらにこの地を立つ前に当所の八幡宮や附近の見物にも若干の時間を費したであろう。この八幡宮のことについては、これまで殆ど論及したものがないので、ここで多少長くはなるがいくらか触れておこう。

芭蕉が観月をした場所は、現在の国鉄篠ノ井線姨捨駅近くの、更埴市大字八幡の長楽寺（天台宗　江戸時代には麓の八幡宮の神宮寺の支院であった）の附近と想定してよいと思うが、このあたりには当時宿泊すべきところもなかったので、芭蕉は観月のあとはおそらく山道を北に半里ほど下り、麓の地に鎮座する八幡宮附近に宿をとったものと推測してよいであろう。この八幡宮の周辺には宿泊施設のごときものもあったと想像されるからである。さてこの八幡宮の正式な名称は武水別神社八幡宮といい、現在は主神に武水別神を、相殿に誉田別命（応神天皇）、息長帯比売命（神功皇后）、比咩大神の三柱を祀っているけれどもこの神社が式内大社である武水別神社の名を公称するようになったのは江戸末期近くになってからのことであり、それ以前は信州川中島の、あるいは更級の八幡宮として広く世に知られていたのである。もと山城国石清水八幡宮の庄園小谷（おうな）庄の鎮護の神社であり、小谷の別宮とも呼ばれていた。古来武人の信仰の篤い社で、特に養和元年（一一八一）六月、信濃の木曾義仲が越後の城資職（長茂）とこの神社の北方の千曲川の河原で干戈を交えた際には、義仲は戦端をひらくに当って当社に祈願をこめ戦勝を得たと伝えられているし、下って戦国時代の甲斐の武田信玄と越後の上杉謙信の川中島の戦においても、両将は共に願文を捧げて戦勝を祈っている。江戸時代には幕府から朱印地二百石が寄進され、芭蕉の訪れた当時の社域の広さは約百五十間四方あり、境内には神宮寺のそれを含む多くの建造物が建ち、壮厳のさまを呈していた。

このような大社である上に、殊に義仲の合戦の史実は『平家物語』にも記述（巻第六「横田河原合戦」）がみられるところであり、平曲の名手であった越人はもとよりとして、芭蕉も義仲の生涯にとりわけ深い関心を寄せていたところから、おそらくはそのことを知っていたであろう。そうした芭蕉は、当地に来て義仲の当社祈願のことなどを聞く機会をもったとしたらこの八幡宮への関心をいっそう強められたに相違あるまい。（もっとも義仲の当社祈願のことは『平家物語』には記述がなく、『源平盛衰記』「於巻第二十七」の「信濃横田河原軍の事」に記載がある。）

それに芭蕉が当地を訪れた八月十五日は、この八幡宮の一年七十五度といわれる数多くの祭りのなかでも霜月の大頭祭と並ぶ大祭である放生会の催された日であった。この祭りの江戸時代の賑わいについては、芭蕉より九十余年後の天明三年（一七八三）に訪れた菅江真澄の紀行『わかこゝろ』のなかに詳細に描写されているが、この神社が元禄年間を境にして衰微したと伝えられていることからすると、その賑わいは芭蕉の来た頃も相当なものであったと想像される。芭蕉は前年鹿島への月見の旅の途中八月十四日に下総葛飾の八幡宮の祭礼に出合っており、翌年姨捨山に月見に来てふたたび八幡宮の放生会に会ったことによって強く印象づけられたであろうことを赤羽学氏が指摘（「芭蕉と八幡」『黎道』第三号　昭和五三・三）されているが、芭蕉は多分この八幡宮の鎮座のことを美濃国を立つ以前に知っていたにちがいなく、放生会の催されることも予測して、祭礼にあえるかも知れないことをひそかに期待していたのではなかったであろうか。

芭蕉はこうして八月十六日の朝は遅く起床し、宿を出てからも八

幡宮への参拝などに多少の時を費したであろう。『芭蕉庵小文庫』所収の「更科姨捨月之弁」に、「山は八幡といふさとより一里ばかり南に、西南によこをりふして、冷じう高くもあらず、かど〳〵しき岩なども見えず、只哀ふかき山のすがたなり。」とあるのは、この神社の正面入口のあたりから長楽寺背後一帯の山を見渡した感じをよく写しているように思われるので、あるいはこの文章は、この参拝の際に、昨夜観月に時を過ごした姨捨山の方角を眺めた記憶をもとに記されたものであったかも知れない。(因みに、ここにみえる姨捨山は、『俊頼髄脳』などに記載のある古代の姨捨山即ち現在の冠着山であるとする説もあるけれども、それは当らないであろう。冠着山も姨捨山の左後方に見渡されるが、その山頂の高さは、神社附近の海抜が三百七十メートルほどであるのに千二百五十二メートルもあって、周辺の山とは独立して聳えているという感じに近い。それでたとえば、「西南によこをりふして、冷じう高くもあらず、」と描写されているのに合わないからである。)

芭蕉が当地を出発した時刻についてはもとより知るべきすべはないが、芭蕉は『奥の細道』の旅の『随行日記』によると、宿泊地を早く立つときには辰の上刻に、遅く立つときには巳の刻あたりに宿を出ることが多いので、それから推して、十六日はこの遅立ちの例よりも時がまわってから宿を出たものとみて、八幡宮に参拝の後当地を去ったのは、あるいは正午の前後と想像することも許されるであろうか。

一方、芭蕉が坂木宿に到着した時刻を考えてみると、十六日の夕方までにはおそらく着いていたものと推察される。『随行日記』の記録をみても、宿に着く時刻は申の刻あたりが多く、遅いときも夕方までには到着している。坂木宿での作「いさよひも――」の句に挨拶の意がこめられているのからみると、芭蕉はこの日にこの宿場に何人かを訪ねているのかも知れず、そうなると、到着があまりに遅くなってからではいっそう不自然である。

以上のように、芭蕉の善光寺参詣を八月十六日とするのは殆ど不可能である。これに対して翌十七日とした場合はどうであろうか。このときは、芭蕉は十六日中に宿泊地である八幡宮附近を出発して坂木宿に到着宿泊、翌十七日の朝に同地を立って善光寺に参詣、その近辺に泊ったものと推測されよう。坂木宿と善光寺の間の距離は約九里であるから一日の行程としては容易な距離であり、このように行動したとするならば、善光寺見物の時間も十分にとることができたはずである。想像の句と解さなければならなかった「月影や――」の句も、十七日とするときは、必ずしもそう解する必要もなくなるのである。

十七日と想定することの弱点はむろん約八里の無駄足を強いられることにあるが、しかし、未知の土地への風狂の旅であれば、これはそう大きく問題とすべきほどのことではないのではなかろうか。もし考慮しなければならないとしたら、日程に余裕の乏しい場合のことであろう。しかしこの旅における芭蕉に、そのような格別な事情があったとは思われない。九月初旬には江戸で活動をはじめているとはいっても、坂木宿から江戸までの距離は五十里十丁であり、四、五日もあれば帰着するには十分である。取り立てて理由とするには足りないであろう。

芭蕉の善光寺参詣は、このように八月十六日であるより十七日である方がはるかに可能性が高いのであり、そこで、この問題についての結論は、はじめに記したように、八月十七日ということにおちつくのである。

いったいにこの旅に関しては、『更科紀行』や「更科姨捨月之弁」

を読んで受ける印象から、これが忽卒の間になされたものであることが自明であることのように思いなされ、この前提の上に合理的な解釈を求めようとする傾向が認められるのであり、そこに旅程を考えるについても誤りを冒しやすい理由があるのではなかろうか。この旅が急ぎの旅であったことは確かであるとしても、それがまったく時日の余裕をもてないほどの忽忙をきわめた旅ではなかったことは、さきに記したとおりである。芭蕉が姨捨山への観月の旅を明確に意図したのは、『みつのかほ』に、「木曾路のたびをおもひ立て大津にとゞまる比、先せたの蛍を見に出て」と前書のある「此ほたる田ごとの月とくらべみん　翁」の句の載っているところから、貞享五年の夏以前であったことが知られている。しかも、『皺笥物語』の記述を信ずるならば芭蕉は、三年前の貞享二年の四月に木曾路を通った体験をしたばかりであり、木曾路についてはもとより知っていたし、善光寺道の道中の様子についてもある程度まで予測することができたとも考えられる。『更科紀行』の旅は、こうして相応の準備と予備知識の上に実行されたものであることを認識することがまず肝要であろう。